

毎日の食事を〈猫用〉y/d にするだけで、  
無理なく「甲状腺機能亢進症」がコントロールできます！

ヒルズのプリスクリプション・ダイエット  
〈猫用〉y/d ドライ・缶詰

● 簡便

毎日の食事を〈猫用〉y/d に切り替えるだけ。  
低ヨウ素食で、しかも、猫が喜ぶおいしさです。

● 効果的

低ヨウ素食の〈猫用〉y/d なら、  
3週間\*で「甲状腺」の健康に役立つことが、  
科学的に証明されました。

● 安全

食事療法なので副作用がありません。  
〈猫用〉y/d なら、食べるだけで  
甲状腺ホルモンの産生を正常化します。

\* Yu S, Wedekind KJ, Burriss PA, et al. / J Vet Intern Med 2011;25:683-684



内容量  
ドライ 1.8kg 缶詰 156g

プリスクリプション・ダイエット〈猫用〉y/d の製品特長	
製品特性	ベネフィット
ヨウ素を非常に低く制限	▶ 過剰な甲状腺ホルモンの産生・放出を抑制する一方、必要量は維持
リンを制限し、低ナトリウムに調整	▶ 高齢期に衰える腎臓、心臓および尿路の健康もサポート!
高レベルのL-カルニチンやタウリンを含有	
マグネシウムを制限し、想定尿pH6.4~6.6	

その想いに  
こたえたい。

ペットのヘルスケアをサポートする「3つの約束」

- 1 革新的な製品 「革新的な研究により実証された栄養」と「おいしさ」でペットオーナーの期待におこたえます。
- 2 役立つサービス 「100%満足保証」「尿石分析サービス」等、すぐに役立つ実践的なサービスでおこたえます。
- 3 頼れる人材 「信頼できる身近なパートナー」として、よりよい診断・ケアに役立つサポートでおこたえます。



革新的! 「甲状腺機能亢進症」を、  
食事でコントロール。

毎日の食事を〈猫用〉y/d に替えるだけで、「甲状腺」の健康に役立ちます。



ヒルズのプリスクリプション・ダイエット  
〈猫用〉y/d ドライ・缶詰



# 猫の「甲状腺機能亢進症」は増加傾向にあります。

活発で食欲旺盛な猫は、過剰な甲状腺ホルモン産生による「甲状腺機能亢進症」かもしれません。早めの診断、早めの治療が重要です。また、普段一緒に生活しているペットオーナーには見過ごしやすい病気でもあるため、猫の定期的な健康診断の重要性を伝えるきっかけにもなり、コンプライアンスの向上につながります。

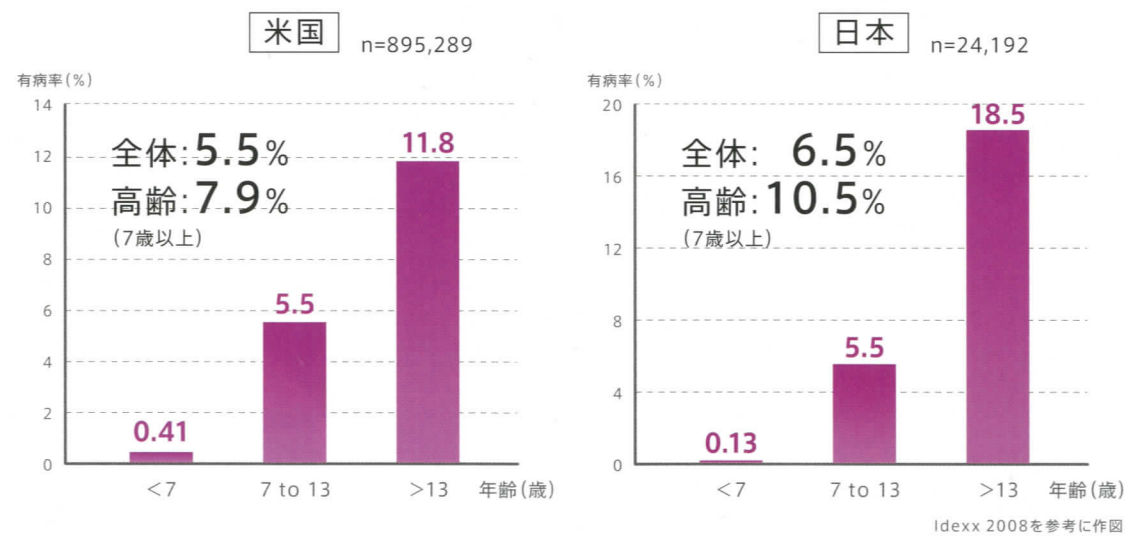
## ① 過剰に産生された甲状腺ホルモンが引き起こす猫の臨床症状

- 活発である(年齢に合わない活動性の亢進)
- 下痢や嘔吐
- 食欲亢進
- ノドの渇きによる多飲
- 食べているのに体重が減少
- 皮膚にハリがなくなる

## ② 猫の「甲状腺機能亢進症」の特徴

- 年を重ねるほど、発症頻度が上昇します。
- 罹病期間が長いほど、症状は重症化します。

猫の「甲状腺機能亢進症」有病率

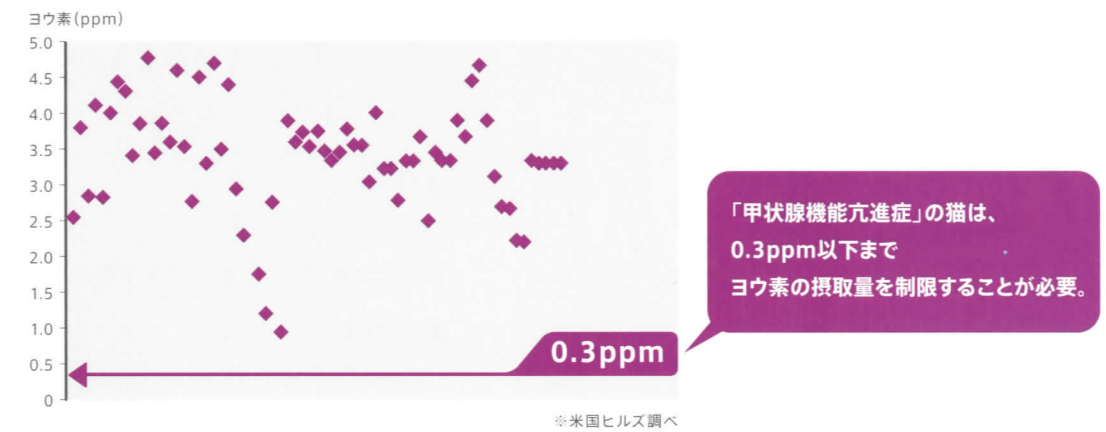


「甲状腺機能亢進症」は、甲状腺ホルモン(血清T<sub>4</sub>値)の検査で容易に鑑別できます。診断・管理の流れは、P5~6のチャートをご参照ください。

# 「甲状腺機能亢進症」の猫には、甲状腺ホルモンの構成成分である「ヨウ素摂取の制限」が重要です。

通常のペットフードに含まれるヨウ素の量はさまざまです。健康な状態の猫なら問題はありません。しかし、「甲状腺機能亢進症」の猫においては、甲状腺ホルモンが過剰に産生・放出されてしまいます。

市販のペットフードに含まれるヨウ素量



毎日の食事を「0.3ppm以下の低ヨウ素食」に切り替えて継続することで、甲状腺ホルモン(血清T<sub>4</sub>値)は正常化します。

●ヨウ素の摂取量を制限することにより、甲状腺ホルモンのレベルが正常化することがわかります。



**革新的!** 毎日の食事を替えるだけで、「甲状腺」の健康に役立ちます。

ヒルズのプリスクリプション・ダイエット〈猫用〉y/d ドライ・缶詰



科学的に証明された栄養が、「甲状腺機能亢進症」を無理なくコントロールします。

- 簡便
  - ・毎日の食事として与えるだけ。
  - ・低ヨウ素食で、しかも、猫が喜ぶおいしさ。
- 効果的
  - ・3週間\*で「甲状腺」の健康に役立つことが科学的に証明された栄養。
- 安全
  - ・食事療法なので、副作用が起こりにくい。
  - ・健康な同居猫が食べても問題がない。

\* Yu S, Wedekind KJ, Burriss PA, et al. J Vet Intern Med 2011;25:683-684

プリスクリプション・ダイエット〈猫用〉y/d の製品特長	
製品特性	ベネフィット
ヨウ素を非常に低く制限	▶ 過剰な甲状腺ホルモンの産生・放出を抑制する一方、必要量は維持
リンを制限し、低ナトリウムに調整	▶ 高齢期に衰える腎臓、心臓および尿路の健康もサポート!
高レベルのL-カルニチンやタウリンを含有	
マグネシウムを制限し、想定尿pH6.4~6.6	

製品仕様 〈猫用〉y/d ドライ 1.8kg

原材料名	コーングルテン、動物性油脂、トウモロコシ、大豆、全卵、チキンエキス、魚油、酵母、カルニチン、ミネラル類(カルシウム、リン、カリウム、銅、鉄、マンガン、亜鉛、イオウ)、ビタミン類(A, B1, B2, B6, B12, C, D3, E, ベータカロテン、ナイアシン、パントテン酸、葉酸、ピオチン、コリン)、アミノ酸類(タウリン、トリプトファン、メチオニン、リジン)、乳酸、リン酸、酸化防止剤(ミックストコフェロール、クエン酸、ローズマリー抽出物)							
乾物成分分析値	蛋白質 36.3%	カルシウム 0.95%	クロライド 0.68%	オキサリ酸 0.62%	脂肪 25.7%	リン 0.66%	マグネシウム 0.067%	ビタミンE 890IU/kg
	炭水化物(NFC) 28.6%	ナトリウム 0.26%	タウリン 0.34%	ビタミンC 134mg/kg	粗繊維 3.1%	カリウム 0.83%	カルニチン 651ppm	ヨウ素 0.2mg/kg

給与量	〈猫用〉y/d ドライ 1.8kg						
体重 (kg)	2	3	4	5	6	7	
kcal	130	176	218	257	295	331	
g	31	42	52	61	70	79	
カップ	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.7	

※200cc計量カップ1杯分の〈猫用〉y/dは、およそ106gです。

製品仕様 〈猫用〉y/d 缶詰 156g

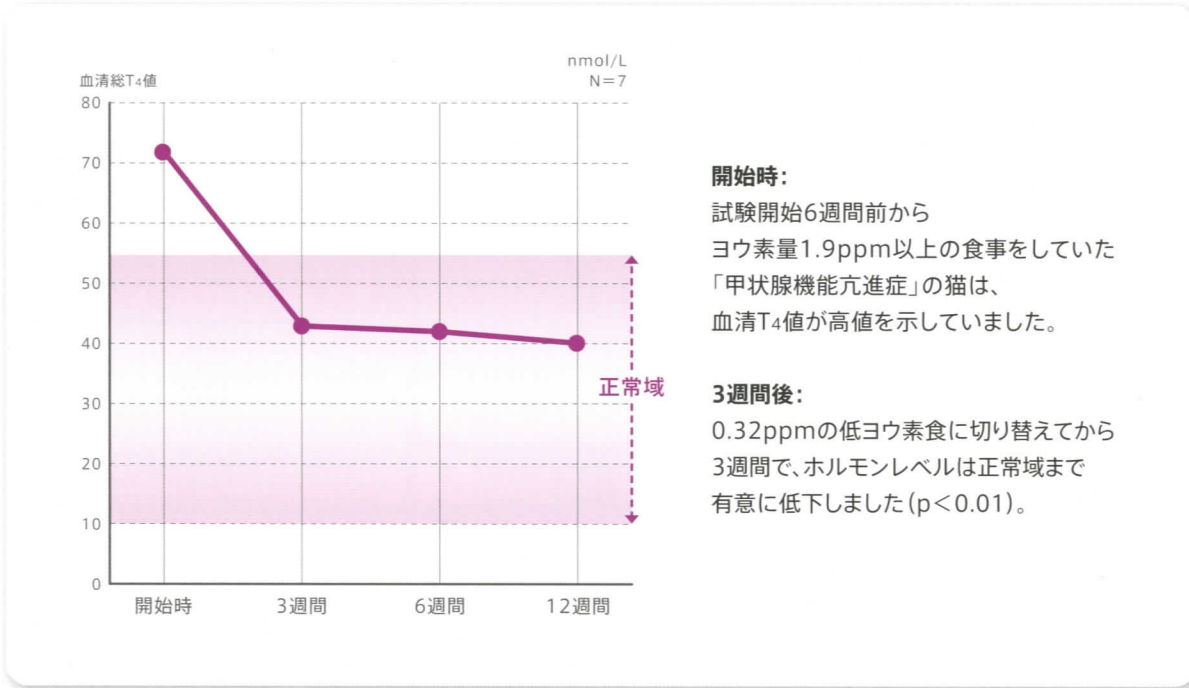
原材料名	ポーク、チキン、トウモロコシ、米、動物性油脂、チキンエキス、セルロース、魚油、酵母、カルニチン、ミネラル類、ビタミン類(ビタミンC、ビタミンE、ベータカロテン、他)、アミノ酸類(システイン、タウリン、メチオニン、リジン)、増粘安定剤(グァーガム)							
乾物成分分析値	蛋白質 34.1%	カルシウム 0.86%	クロライド 0.93%	オキサリ酸 0.66%	脂肪 25.9%	リン 0.59%	マグネシウム 0.062%	ビタミンE 797IU/kg
	炭水化物(NFC) 31.4%	ナトリウム 0.24%	タウリン 0.24%	ビタミンC 45mg/kg	粗繊維 3.1%	カリウム 0.86%	カルニチン 652ppm	ヨウ素 0.2mg/kg

給与量	〈猫用〉y/d 缶詰 156g						
体重 (kg)	2	3	4	5	6	7	
kcal	130	176	218	257	295	331	
g	107	145	179	212	243	273	
缶	0.7	0.9	1.1	1.4	1.6	1.7	

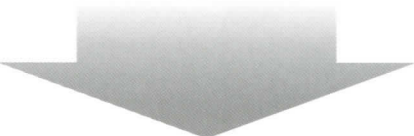
\*この給与量は目安です。適正な体重を維持できるように、適宜、量を調整してください。

食事を低ヨウ素食に切り替えて、継続的に与えることで正常域を維持。

切替え後約3週間\*で甲状腺ホルモンの値が正常化されます。



\* Yu S, Wedekind KJ, Burriss PA, et al. J Vet Intern Med 2011;25:683-684

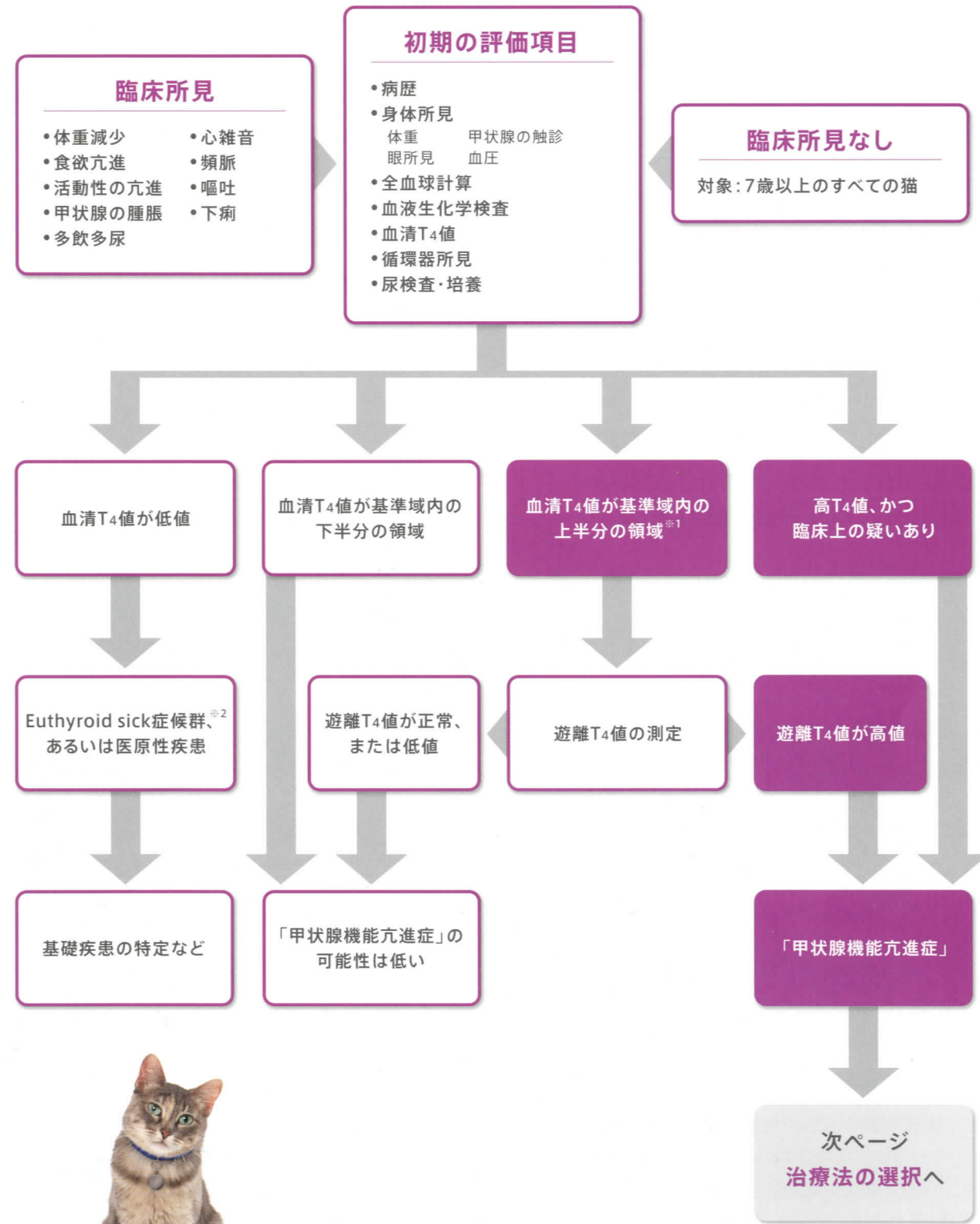


〈猫用〉y/d による食事療法を継続することにより、ホルモン産生が正常化された状態が継続します。

**健康な同居猫がいる場合**  
健康な猫に〈猫用〉y/d を通常食として与える場合には、他の猫用ドライ、ウェット製品またはトリーツ製品などを小さじ一杯分加えるだけで、ヨウ素を補うことができます。

**腎臓疾患について**  
もともと腎臓に疾患を抱える猫が「甲状腺機能亢進症」の治療を開始した場合、腎臓疾患が顕在化することがあります。〈猫用〉y/d は高齢猫に配慮してリンを制限していますが、腎臓疾患の臨床徴候が見られた場合には、ヒルズのプリスクリプション・ダイエット〈猫用〉k/d への切替えも考慮してください。

# 猫の「甲状腺機能亢進症」の診断



※1 2~4週間後にT4値を再検査することもひとつのオプションです。  
 ※2 甲状腺疾患以外の全身疾患により、甲状腺機能に異常のない猫における甲状腺ホルモン低値の状態。



# 猫の「甲状腺機能亢進症」の治療法の選択



低ヨウ素食(〈猫用〉y/d)の継続により、  
ホルモン産生は正常域を維持できます。

腎臓疾患を合併している猫においては、  
〈猫用〉y/dに切り替えた後、  
初期の再検診は2週間、  
4週間および8週間後に行い、  
それ以降は3~4ヶ月ごとに継続的に  
経過観察を行う必要があります。

